

唯識とクオリア

中 田 峰 彦

はじめに

今日まで、意識に関して様々な研究がなされているが、最近になって、クオリアという概念を用いた意識についての研究が、哲学や脳神経学などの分野で始まっている。日本では、茂木健一郎がその第一人者に当たると言われる。しかし、茂木のクオリアを用いた意識論には、疑問を抱かざるをえない点がいくつか認められる。

そこで本稿では唯識思想（法相宗）と茂木の意識論を比較して、意識のとらえ方について改めて考えてみたい。ただ、意識という言葉は、哲学や心理学などによって、その定義が統一されていないため、ここでは、意識とは我々が直接経験・体験していること及びその心理的内容とする。

唯識における意識のとらえ方が絶対的に正しいとは言えない

が、一六〇〇年という長い歴史に裏打ちされた深い洞察とその思想体系は、意識を考えるに当たって、参考にする価値はあると言えるだろう。

ただ、唯識思想の全てをここで挙げて考察するわけにはいかないで、主に心所という意識の働きを説明した部分を中心に進めていく。

一 唯識と意識について

唯識は、認識対象（法）や認識主体（我）の実在を否定する。あるのはただ識のみで、世の中の全ては識の転変（変化）により生じたものだといふ。その識の転変には、異熟・思量・了別境識の三つがある。異熟は阿頼耶識、思量は末那識とも呼ばれ、了別境識は眼識・耳識・鼻識・舌識・身識（前五識とまとめて呼ばれる）と第六意識（通常我々が使う意識という言葉とは別

物)に分けられる。これらの識が生じると、それに応じて心所と呼ばれる働きが生じる。識と心所の関係であるが、それぞれが認識という意識の構造で、心所はその機能であるということができる。構造としての識がなければ、心所は機能しえず、心所が機能しなければ構造としての識はその意味がない。どちらが欠けても、意識を形成することはない。

異熟・思量・了別全ての識に共通して、必ず遍行という心所が生じる。この遍行は触・作意・受・想・思の五つに分けて考えられる。

まず、触とは、根(感覺器官)と境(認識対象)と識の三つを合わせる作用のことである。触により、これら三つが触れ合うことで、意識が成立し始める。

次に作意。識を対象に向かわせようとする作用のこと。触と同様に、意識の基礎となる部分である。

続いて受。触・作意により生じた識の中の対象が、順境(良い)か、違境(悪い)か、俱非(どちらでもない)か判断する作用のこと。

そして想。認識対象が我々にとつての何であるかを知る作用である。ここで、対象に言葉が貼り付けられる。

最後に思。想で対象に言葉が貼り付けられた後、生じた識が善か悪かが判断され、身体的行為や言語的行為が引き起こされる。

我々は、自分たちとは別に世界があり、その我々とは別の世

界を認識していると考えがちであるが、実際に我々が認識している世界は意識の外にあるものではなく、我々の中、つまり意識の中にある、というのが唯識の考え方である。意識主体としての「私」と認識対象である「世界」というものは、唯識では想定されていない。あるのは認識(識)とそれに伴うある種の心的作用(心所)だけだと唯識は考える。

〈識〉

「論。識と云うは謂はく了別するぞ。」

述して曰く、識の名義を釈す。今は行相を挙げて識の自体を顯すなり。心意識了は名の差別なり。故に了別を以て識の義を釈す。」

「論。此れが中の識の言には亦心所をも撰む。定めて相応するが故に」二四一^a

「論。六の根と境とに従つて種々異なるが故に」

述して曰く、根と境と各六別なることをもつて識も彼れに従つて異なる。く中略く」四一五^c

〈心所〉

「論。心所の此るところは識に随つて説くべし。」述して曰く、其の心所法をば既に心に属す。各本識に随つて以て所依をば説く。故に識に随つて説くべしという。」

「論。心と心所とは異類にして共生すと雖も而も互いに相応す。和合して一に似たり、定めて俱に生滅す、事業必ず同なり、一つが開導する時に余も亦開導す。故に展転して等無間縁と作る。

諸識は然らず例と為すべからず」

述して曰く、受・想等の法は異類にして共生すれども、而も（一）相応して相違背せず。（二）和合して一に似たり。〔中略〕心・心所は和合せり、和合せざるには非ず。離別して殊異なりとは施設すべからずといへり。（三）定んで俱に生滅す。（四）事業必ず同なり。俱に此の境を取るをもつてなり。（五）故に随つて一の心が開導する時に相応の心所も亦能く開導す。此の五義を具せるが故に、故心には心所が与に心所は心が与に等しく無間縁と作ることを得。五の義というは、一には相応なり、即ち所依と時と事と処との四の義等同なるが故に。二には和合して一に似たり。三には俱に生滅す。四には事業同なり。三性必ず等しきをもつて。五には開導すること同なり。諸の識は然らず。各互に相望するに此の五を具せざるをもつて、心所に例して異識を同ぜしむべからず。」三九一

〔遍行〕

「〔論。六識は幾ばくの心所とか相応する。〕

述して曰く、これは問起なり。」

〔論。頌に曰く、

この心所は遍行と別境と善と煩惱と不定となり。皆三の受の相応す」

述して曰く、上の三句は六位の心所の総名を列ね、下の一句は正しく受俱を解す。

〔論に曰く、此の六転識は総じて六の位の心所と相応す。謂

はく遍行の等きぞ」

述して曰く、下の文に二有り。初に心所等の頌の上三句を解し、後に受俱を解す。初の中に復二あり。初に総じて此の心所等の上三句の意を解し、後に別して解す。これは即ち総なり。正しく此の字を解す。頌を指すことは知るべし。

何ぞ心所と名づくる。心所というは何の義ぞ。

〔論。恒に心に依つて起こつて心を相応す。心に繫属せり、故に心所と名づく〕

述して曰く。自下は別して解す二有り。初に心所といふ二字を解し、後に遍行等の義を解す。〔略〕

依つて起こる心もし無きときは心所生ぜず。要す心を依として方に生ずることを得るが故に。若し爾らば、心を（他の）遍行に望めて心所と名づくべきや。二には心と相応す。彼の五（遍行）をば心と相応すと説くが故に、心は心と相合せざるが故に、又、時と依と縁と事との四の義を具せざるが故に、説いて相応と名づく。〔中略〕三には心に繫属す。心を以て主と為し、所は之に繫属す。心は自在なること有るをもつて所に非ず。是の義を以ての故に心に繫属す。この三の義あるが故に心所と名づく。以下略〕四二一 b

「然るに経部などが別に心所あることなしというを破して、故らにこの五は心が起こるとき、みな生ずることを顯す。顯揚の第一に証をひいて有なりと説く如し。」四二九 a

〈触〉

「一論。触と云うは謂はく三和して、変異に分別するぞ。心・心所を境に触れしむるを以て性と為し、受・想・思のごときが所依たるを業とす」

「三和」一論。謂はく根と境と識との更相に随順せるが故に三和と名づく」

述して曰く、中略く正しき三和の体は謂はく根と境と識なり。体異なるを以て三と名づく」三二八c

「述に曰く、大論の第三に解く、根は壞せず、境は現前す等といえり。五十五にまた謂はく、五遍行の心所は、一切の心に遍じて生ずといえり。中略く諸の（識の起こる）時には（必ず）境を縁じ根に依るなり。（三和あり）と名づく。三和は（定めて触を生ず）。また（触に由る）が故に、方に三和あり。また（もし触なき）時には、（心心所い）離散し（和合して）同じく（一境に触すること）能わざるが（故に）。いまは既に三（和）合し、および心心所和合して、同じく境に触す。故に必ず触あり。定めてこれ遍行なり。」四二八b

〈作意〉

「一論。作意と云うは謂はく能く心を警するを以て性とす。所縁の境のうへに心を引くを以て業とす」中略く」三二八c

「一論。謂はくこれが起こすべき心の種を警覚し、引いて境に興味するが故に作意と名づく」

述して曰く、謂はく作意などが並びに未だ生ぜざりぬ位に、

中略く作意が心を警するに二の功力有り。一には心をして起こらざるを正しく起こらしめ、二には心をして起こり已つて境に興味かしむるが故に中略く」三二九

「作意の性は、よく（心）心所を警して、（自境に興味かしむ）。これもしなくんば、心も則ち起こらず。心の現行なくなりぬ。」四二九b

〈受〉

「一論。受と云うは謂はく順と違と俱非との境を領納するを以て性とす、愛を起こすを以て業とす」中略く」三三一b

〈想〉

「一論。想と云うは謂はく境のうへに像を取るを以て性とす。種々の名言を施設するを以て業とす」中略く」三三二a

「名を説いて其の想とするは因に従いて説く。想を説いて名とするは果に従いて説く。世の人の汝が想は是れ何ぞ名は是れ何等ぞと言ふが如し。此の業はこれ（第六）意（識）と俱なるの想（の心所）を云ふ。中略く」

〈思〉

「一論。思と云うは謂はく心を造作せしむるをもつて性とす。善品等のうへに心を役するを以て業とす」中略く謂はく邪正等行とは即ち身語業なり。この行が因は即ち善悪の境なり。この境の相を了するに由るが故に、思しい諸の業を作つて善悪などの事を起こすが故に、境の正因等の相を取るは是れ、思が業なりと言へり」三三二b

二 クオリアと意識について

まず、クオリアとは何か。もともとはラテン語の質を表す *Qualitas* に由来する語で、二〇世紀中ごろから、哲学の中で使い始められた、あくまで仮説的概念である。クオリアという概念には人によって様々な定義がなされているが、ここでは茂木の「主観的体験の中に現れる様々な質感」という定義をもとに話を進めていく。

茂木は、人間の意識は脳内のニューロン活動により生み出される⁽³⁾と考えている。

バラを見るということを例として、茂木の考えを脳神経学的に簡単に説明すると次のようになる。まず目や鼻（感覚器官）がバラをとらえ、それが電気信号となり脳に伝わる。脳内でニューロンが発火し、バラのクオリアが生じる。しかし、バラや赤い色といったクオリアがそれだけで成立するわけではない⁽⁴⁾。クオリアはそれを見る「私」という視点なしには成立しない⁽⁵⁾と茂木は言っており、この視点を志向性の束⁽⁶⁾だとしている。また、この志向性が意識化されたものが、志向的クオリアだと言っている⁽⁷⁾。

そして、我々が外界を認識するときの意識は、この志向的クオリアと感覚的クオリアのマッチングにより成立し、何かを想起したり想像したりしているときは、志向的クオリアが単体で立ち上がっていると説明する⁽⁸⁾。

しかし、クオリアとは、「主観的体験の中に感じられる様々な質感」という茂木本人の言葉にあるように、感じられる対象のことである。ならば、志向的クオリアがそれ自体で意識として成立し、それが感じられるというのはおかしい。感じる側と感じられる側、言い換えるなら、主客が揃わなければ、何かを感じるということは成立しえないからである。

茂木の説明には、この志向性が意識化されるということはどういうことなのかについての説明がない。志向性とは何かに向けられている心的状態であるのに、それがどのように意識化されるというのか。また、志向性が意識化されると言語的・社会的文脈化におかれた質感に変化するという点に関しても説明がない。

加えて、志向的クオリアと感覚的クオリアのマッチングという言葉の意味が、明確になっていない。志向性により感覚的クオリアをとらえ、それを認識するというのであれば理解できるが、質感であるクオリア同士が合わさつ（マッチングし）ても、そこには質感しかない⁽⁹⁾ので、何も感じられないはずである。このマッチングした二つのクオリアを、認識しなければ、これらはいつまでたつても質感のままである。質感は認識されてこそその質感である。認識されないのであれば、それはないのと同じである。

また、感覚的クオリアが単独では成立しえず、志向的クオリアとのマッチングでしか成立しないのであれば、言語や社会と

いう高次の概念とは無関係な生物や、それらを獲得していない幼児や動物は志向的クオリアをもちえないから、感覚的クオリアを感じる事ができず、外界を認識できないのではないか、という疑問も生まれる。

志向性や志向的クオリアという茂木の仮説は興味深いが、以上のように、彼の説にはいくつかの矛盾点が見受けられる。

三 唯識とクオリア

我々の認識対象は我々の内にあると考えている点や、認識過程で対象に言葉や価値といったものが貼り付けられるという点など、唯識と茂木のクオリア論には似ているところがある。また、茂木は自身の著書「脳とクオリア」の中に、「私が認識することと、私の「外」にある事象とは、原理的に無関係なのである。『中略』認識はあくまでも私の一部なのだ。」(二三頁)と言っているように、我々の認識は脳内現象であると考えている。

認識そのもののとらえ方という点では、唯識と茂木の考えは、ほぼ一致すると見てよいだろう。更に、唯識と同じく茂木の意識論も、意識や心というものがどこかにあり、そこで認識がなされるとは考えていないという点も共通している。

しかし、唯識と茂木が決定的に違うところは、意識のとらえ方である。唯識は対象の認識が意識であるとするが、茂木の意識論では、私という主観が対象を認識することが意識であると

している。

対象がどんな事物事象であるにせよ、それを認識しないことには意識は成立しない。何らかの対象を認識したからこそ、その意識が生じるのである。どのようなクオリアであれ、それは認識されなければ、ないのと同じである。茂木がプランターノの「志向性」を引き合いに出したように、おそらく全ての生物は環境適応のために「志向性」ともいうべき性質をもっていることは確かであるが、それが意識の主観性を説明するに十分な条件ではない。感覚的クオリアと志向的クオリアがマッチングすることで意識が生まれるのではなく、内的外的状況の認識の上に、意識が生まれるのである。そもそも、質感というからは、認識していなければ、対象について「『な質感』」ということはできないのではないだろうか。

我々の意識の中に、「私」という視点があるのは紛れもない事実であるが、我々は常に明確なそれをもって行動しているわけではないし、様々な経験全てにそれが伴っているわけではない。「私」という視点は、自分自身を客観的に見ているときに生じるものであり、自分自身を客観的に認識する作用や認識の構造の事である。

このように考えると、主観である「私」という視点を持ち込まずとも、唯識のように認識という観点だけから意識を説明できるはずである。

これまでの意識の研究は、人間のもつ意識の特殊性、「私」

にとらわれすぎて、方向性を見失いつつある。意識は認識の上に成り立つものであり、「私」という視点は意識があるからこそ成立するものである。意識を研究対象とするのであれば、「私」という視点から考えるのではなく、認識の作用と構造から探っていけば、その本質が見えてくるのではないだろうか。

(1) 「識」とは「vijñana (了別する)」の漢訳であるが、「唯識」という場合の「識」は「vijñapti (了別される)」の漢訳である。

①「由仮説我法」(ここで言う法とは真理ではなく、対象のこと) 一

②「彼依識所変」一

③「此能変唯三 謂異熟・思量・及了別境界」一〜二
以上「唯識三十頌」数字は何頌目を指す

(2) クオリアとは「私たちの主観的体験の中に感じられるさまざまな質感」(茂木健一郎「心を生み出す脳のシステム」NHKブックス、二〇〇一年、四〇頁)

「私たちが体験できるクオリアには、大きく分けて二種類のものがあるように思われる。すなわち、感覚的クオリアと志向的クオリアである。感覚的クオリアとは、中略、視覚でいえば、色、透明感、金属光沢など、外界の性質が鮮明で具体的な形で感じられる時の質感である。「蓄蔽」をそれと認識する以前の言語化される以前の原始的な質感のことだ。一方、視野の中の「蓄蔽」を構成する感覚的クオリアを「ああ、これは蓄蔽だ」と認識するとき、心の中に立ち上がる質感が志向的クオリアである。中略、外的な状況の「解釈」として心の中に現れる質感も志向的クオリアである。中略、別の言い方をすれば、言語的・社会的文脈の下に置かれた質感のことである。」(同前、四七〜八頁)

(3) 「私たちの意識を生み出しているのは、脳の中のニューロン活動である。」(同前、二六頁)

「私たちの意識が、脳のニューロンのネットワーク全体のシステム論的性質から生み出されているということである。」(同前、二六頁)

(4) 「私が意識の中で「赤い色」を感じたとする。この主観的体験に、V4野の赤い色に対して反応選択性を持つニューロン活動が寄与することは事実である。しかしこの時、「赤い色」という表象は、V4野の単一のニューロン活動によって生じたものでは決してなく、そのニューロンが脳というシステムの中で他のニューロンと結んだ関係性の下に生じたのである。もし、V4野の「赤色」ニューロンを一つだけ取り出して、それをペトリ皿に置き、電極で刺激して活動させたとしても、そこには「赤い色」も、それを感じる「私の意識」も存在しない。」(同前、二七頁)

(5) クオリアは、客観的に存在する物質のように、それ自体としてあるのではなく、必ず「私が〇〇のクオリアを感じる」という形で表象される。(同前、四四頁)

必ず、「私」という視点と対になってクオリアは成立する。(同前、四五頁)

(6) 「私」とは、志向性の東である。そして、様々な志向性の「起点」としての「私」がある。そして、志向性の起点にある肝心な「私」自体は、目に見えたり、触ったりすることができない。中略、「心が何かに向けられている」という志向性の成立は、「何かに向ける」主体としての「私」なしではあり得ない。(同前、一五八頁)

(7) 志向的クオリアは、中略、私たちの心がかもつ「志向性(何かに向けられている心的状態)」の現れである。(同前、六三頁)

志向性の働きが意識してとらえられるとき、そこに志向的クオリアが立ち上がる。

(8) 私たちが心の中で何か「外」のものを表象するときは、必ずこの二つのクオリアが対になってマッチングが取られている。(同前、五三〜四頁)

今、目の前に実際にあるものを見るときののみ、それを「赤い色」や「つやつやとした光沢」といった感覚的クオリアとともに表象するのである。それ以外は、志向的クオリアが単独で立ち上がっているということになる。(同前、五五頁)

志向的クオリアが、中略、感覚的クオリアなしに、単独で存在することはありうる。例えば、何かを想像したり、思い出したりしているような場合だ。(同前、五四頁)

「蓄薇を見る」というような私たちの主観的体験には、大きく分けて、「感覚的クオリア」と「志向的クオリア」の二つの要素がある。「蓄薇を見る」という主観的体験は、蓄薇を構成する色などの感覚的クオリアと、「ああ、これは蓄薇だ」という認識を支える志向的クオリアの間のマッチングとして成立している。(同前、六三頁)

主要参考文献

佐伯定胤訳「国訳一切経 論疏部一三」大東出版所、一九三八年

(一九九二年改訂版)

佐伯定胤訳「国訳一切経 論疏部一四」大東出版所、一九四〇年

(一九九三年改訂版)

佐伯定胤訳「国訳一切経 論疏部一五」大東出版所、一九七四年

(一九九〇年改訂版)

富貴原章信訳「国訳一切経 論疏部一六」大東出版所、一九七四年

(一九九三年改訂版)

茂木健一郎「心を生み出す脳のシステム」NHKブックス、

二〇〇一年

結城令聞、「唯識三十頌」大藏出版、一九八五年(二〇〇一年新装版)

「仏教学辞典」法蔵館、二〇〇八年

G・M・エーデルマン「脳から心へ」(金子隆芳訳)新曜社、

一九九五年

アントニオ・A・ダマシオ「無意識の脳 自己意識の脳」(田中三彦訳)講談社、二〇〇三年

仲野良俊「深層意識の解明」法蔵館、一九八五年

仲野良俊「仏教における意識と真理」法蔵館、一九八五年

(なかだ・みねひこ、唯識とクオリア、武蔵野大学大学院)